

月経困難症(月経痛)

①**機能的月経痛**: 初経後1～2年頃から起きる月経痛で、子宮内膜の剥離によって産生が高まったプロスタグランジン(生理活性脂質)が、子宮平滑筋を過度に収縮させ、血管攣縮(虚血)を起こして痛みを生じます。プロスタグランジン合成を阻害するNSAIDs(非ステロイド性抗炎症薬)が効きます。

②**子宮内膜症**: 月経血(子宮内膜を含む)が卵管を逆流して卵巣(チョコレート嚢腫)や骨盤の内外へ播種し定着して、月経に一致して痛みます。生殖年齢女性の約10%が罹患します。近年、初経年齢が早く閉経が遅く、晩婚で少出産のために、生涯月経回数が増えて内膜症リスクが高まっていると言われています。治療には、エストロゲンの内膜増殖作用を抑えるため、低用量EP、黄体ホルモン作用を持つプロゲステンを使用します。

③**子宮腺筋症**: 子宮筋層へ子宮内膜が浸潤した状態です。

④**子宮筋腫**: 婦人科良性疾患の20～30%(最多)を占め、閉経してエストロゲンが減ると退縮します。

健康 ♪ 外来ニュース

女性ホルモン

●**月経周期**: 月経が終わると脳(下垂体)から卵胞刺激ホルモン(FSH)が出て、卵巣内の卵子をもつ卵胞からエストロゲン(卵胞ホルモン)を分泌させて、子宮内膜を増殖させます。次いで脳から黄体化刺激ホルモン(LH)が出ると、卵胞から卵子が抜けて(排卵)、卵胞は黄体に変化してプロゲステロン(黄体ホルモン)を産生し、子宮内膜の増殖を止めて受精卵の着床(妊娠)に備えます。妊娠しなければ両ホルモンは減衰して、子宮内膜の脱落(月経)を生じます。その後、エストロゲンの減衰が脳のFSH分泌を促して、次の月経周期が始まります。

●**更年期障害**: 日本女性の閉経は平均50.5歳で、前後5年を更年期といいます。卵巣機能が衰えてエストロゲンが減るので、脳はFSHとLHの分泌を増加させて、卵巣を刺激してエストロゲンを増やそうとしますが、卵巣が応じられずに、全身のホルモンバランスが崩れて、自律神経失調状態(ホットフラッシュなど)を起こします。血液検査ではエストラディオール(E2)が低下し、FSHとLHが上昇します。治療として、エストロゲン(E)単独では子宮内膜増殖作用によって子宮体がん発生のリスクが高まるので、過度の子宮内膜増殖を抑えるプロゲステロン(P)を併用する療法(EPT)が1980年代に確立され、いつまでも若くありたいと望む女性に歓迎されました。しかし、2002年NIHの臨床試験(WHI)が乳がん発生率が上がると報告したため、使用が控えられる事態に。それから約15年後、WHIの論文の欠点が明らかになり、EPTの有用性が見直されました。(下記へ↓)

ホルモン補充療法(HRT)

現在のガイドライン2017では、女性ホルモン投与の開始時期は60歳未満あるいは閉経後10年未満が推奨されています。更年期症状の緩和、骨粗鬆症の予防や、心・血管疾患・認知症・消化器がんの発症リスクの低減などの効果があります。使用中止後5年までは、子宮体がん・乳がんの定期的検診を受けることが大切です。エストロゲンの投与方法として、経口剤は肝臓で凝固因子を生成増加させて血栓症リスクを上げる可能性があるため、肝臓を通過しない経皮剤(貼付剤)を勧める意見もあります。



医療法人 祥佑会

藤田胃腸科病院

〒569-0086 高槻市松原町17-36

TEL 072-671-5916

FAX 072-671-5919

健康 ♪ 外来

水曜日 14:00～17:00(要予約)

担当: 中嶋